

|                  |                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 書評                                                                                                                                                                                                                |
| Sub Title        | Book reviews                                                                                                                                                                                                      |
| Author           |                                                                                                                                                                                                                   |
| Publisher        | 慶應義塾大学商学会                                                                                                                                                                                                         |
| Publication year | 1962                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle           | 三田商学研究 (Mita business review). Vol.5, No.3 (1962. 9) ,p.117- 121                                                                                                                                                  |
| JaLC DOI         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes            |                                                                                                                                                                                                                   |
| Genre            |                                                                                                                                                                                                                   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19620900-0117">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19620900-0117</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



稲葉 襄のぼら

## 「中小工業経営論(序説)」

——中小工業問題の理論——

1、本書は、「独占期における中小工業問題を、内外の中小工業問題の比較研究を通して、具体的に展開したものである。」(序言)

著者はさきに「工業経営論序説」(昭和三十三年、森山書店刊)において「工業経営の生成・発展過程を、独占期にいたるまでの時代について、論理的に歴史的な順序を究明し、同時に具体的に歴史的な事実をたぐね実証することによって、理論と歴史との統一的方法による社会的関連の解明」をなされた。本書はその研究成果を基礎とするものであることが序言にうたわれている。また同時に、「本書はあくまで中小工業の経済論的分析に主力をおいたものであり、その意味においては、中小工業経営論としては、序説的なものにならざるべき」むねが注記されている。

本書はつぎのような構成をもっている。

### I、中小工業問題の意義—その一

1、小工業から中小工業へ

2、中小工業の存在要件

3、中小工業の量的重要性

### II、中小工業問題の意義—その二

1、アメリカにおける中小工業問題

2、イギリスにおける中小工業問題

3、ドイツにおける中小工業問題

4、日本における中小工業問題

5、結語

### III、中小工業問題の具体的展開

1、中小工業資本と労働

2、中小工業資本と独占資本

### IV、企業系列化

1、企業系列化の生成と発展

2、企業系列化の本質

2、本書のサブタイトルは、「中小工業問題の理論」となっている。この「問題の理論」ということは多少不明なのであるが、まず「その内部に種々の階層性と複雑さをもった中小工業経営」という概念は、「独占資本と非独占資本的経営間の対立と相互依存の矛盾関係」として、つまり「理論的には独占と非独占との範疇として処理されるべきものであることが明らかにされている。それゆえ「小工業から中小工業へ、あるいは小工業経営から中小工業への事実的ならびに問題の推転は、資本主義発展の必然的道行きであり、それはまた産業資本主義段階から独占資本主義段階への構造的変革の一表

現であり、構造的矛盾の自己発展のある意味における集中的現われ」なのである。(九頁)そして、中小工業の「存在の根拠」は、「中小工業は独占的大工業にとって独占価格、特別剰余価値、系列化等々による独占利潤の一源泉であると同時に、景気変動に対する安全弁であり、かつまた独占資本内部における労働者の対抗力を弱め、独占資本内部の労働者からの搾取を容易にする一つの条件となっている」ことに求められるのであり、「独占と中小工業との結びつきは複雑であるが、全体としてみるならば、両者は互に競争しつつ、相互依存の関係にあり、しかも前者が後者を利用し、収奪している」というという関係にこそ、現代社会における中小工業存立の主要な理論的根拠があると思われる。(一四頁)とされている。さらにこの一般的な中小工業の「存在根拠」にたつて、現実的に中小工業を存立させる技術的・経済的・社会的な具体的な条件が説明される。(二七頁)この具体的な条件をもつ中小工業が、より究極的に、どうして生まれてくるかの「発生原因」について、「その最も主要な原因を、独占資本の成立に伴う二極分解の論理に求め」ている。「すなわち一方における資本の集積と集中、他方における資本の分散と縮小の過程がこれである。(二二―二三頁)

それにつづいて、中小工業の量的重要性を日米英について統計的に検討し、さらに第II章(三七―一七四頁、全頁数の半分以上)で、米英独自の中小工業問題の実態と各国における中小工業問題に関する「学説」が検討されている。そしてそれらを整理検討する過程で得られた著者の「私見」(二七一頁)はつぎの点に収斂する。「中小

工業問題は、資本と賃労働との資本主義の基本矛盾が、一面において異種資本間にあられた資本内部間の矛盾として、他面中小工業分野にあらわれた資本と労働の矛盾として、分化現出した両面性を、みずからの内に統一的に含んだ中小工業が、独占への依存と対立の矛盾の関連のもとに、全体的・基本的には独占資本による収奪のために危機的狀態に直面したことをその本質的契機とする。(二三七頁)

第三章は、中小工業資本と労働の関係として剰余価値生産が、中小工業資本と独占資本の関係として、蓄積、回転、分配、再生産が、「中小工業問題の主要な問題群」としてとりあげられている。

第四章では、きわめて今日の問題である「企業系列化」について、事実検証にたつて、問屋制―下請制の発展線上にこれをとらえ、「企業系列化は、本来の問屋制支配が流通過程の支配としての商業資本の機能における支配であり、本来の下請制支配が流通過程を媒介とすることによっての生産過程支配としての産業資本的機能における支配であるのに対し、すなわち総過程の支配としての金融資本的機能における支配であることをもって特徴づけられる」とされている。

3、以上本書の要点を紹介したのであるが、本書全体を通じての基本的な特色と問題点を指摘してみたい。

本書における中小工業問題のとりあげ方の特色、接近方法は、結局のところ、従来の中小工業問題研究の比較検討を通じて、中小工

業問題の本質究明をしようとすることにあると思われる。その意味で、全く独自の、従来の中小工業論になかったことを提起しているものではない。

精力的に整理分析されている米英独日の中小工業問題の実態ならびに「学説」については、従来の中小工業論を網羅的にとりあげ、また諸理論の背景となっている各国の経済構造との関連で諸理論を位置づけていられる点で、注目されるものである。しかしそれらの諸理論を積極的に検討批判する独自の視点があまりないため、結果的に、単に諸理論の羅列に終わっているうらみがないとはいえない。端的にそれは、「語学説の類型的概括」(一六六頁)にあらわれている。そこでは、A、積極的存続論(不完全競争論、最適規模論、その両者の結合理論、中小企業の役割を重視する論)と、B、消極的存続論(一、近代経済学的分析へ、資本の規模的側面に問題を見出す論、も、資本の構造的側面に問題を見出す論)二、マルクス経済学的分析へ労働、社会問題に求める論、独占資本への服従ないし独占資本の都合に求める論、中小企業資本家の性格を究明する方法によるもの)といった分類がなされているのである。この分類について、著者の視角からすればそれぞれの説がどういう意義と限界をもつものなのかの積極的批判は行なわれていない。それらの諸説の「長所短所」は述べてあるが、単に長所短所の指摘であって、全体としての意義評価・批判はない。しかも、たとえばが国の語理論家(有沢、山田、高宮、松井、末松、山中、藤田、牛尾、豊田、伊東の各氏)をとりあげる場合、必ずしも語氏の所説を全面的に正論を射て引用紹介・

批判しているといえないものを多く感ずる。また同時にそれらの所説の諸関連・いわば論争史的なとらえ方の努力はなんらなされていない。従って、それぞれバラバラにつながりなくとりあげられ「長所短所」が指摘されている。しかもさきの語学説の類型的概括においては、「中小工業の存続要因という側面の把え方における相違」(一六六頁)から区分されているのであるが、この側面の把え方の相違から類型化することが、著者の視点からいってどういう意義をもつのか全く不明である。従来の多くの中小企業論がいわゆる「存続条件論」を中心に展開してきたことは事実である。それゆえこれを基準に単に分類のための分類をすることは無意味ではないとしよう。

しかしその分類の最後に、「世界各国における語学者の説を、中小工業問題の本質解明を基準として理論的系譜にもとづき分類し類型化すれば以上のように概括できるであろう」(二七一頁)といわれているのを見ると、読むものは混乱せざるをえないであろう。ここでは、中小企業「存続条件」論が、中小企業問題の本質論にすりかえられている。積極的・消極的存続論といわれる意味が理解できないし、大規模経済の利益を享受できないところの問題性を見出す近代経済学的理論と「民族資本論」が同じ「消極的存続論」のなかに分類される根拠は皆目不明である。両者は「中小工業問題の本質解明」においてどんな共通点があるのだろうか。

ついで、著者自身の中小工業問題にたいする基本視点が、さきの諸「学説」の分類との関連で問題である。まず、著者が積極的に述べている次の点はその限りで全く正しいのである。すなわち「一方

において巨大工業経営は中小工業経営を駆逐しながら、同時に他方において中小工業をみずからの補助的なもの、自分のために利用することが出来るものとし、中小工業経営もまたみずからの生存のために大経営を利用し、相互依存的・相互扶助的關係をもちながら、全体としては巨大工業経営による最大限の独占利潤獲得という経済法則がつかぬかかっているという視点(二二二頁)である。しかしこれがより具体的に、どのような相互依存・扶助關係としてとらえられるのか必ずしも明らかでない。この点、わが国中小工業問題の特殊性という形で、その特殊性の「資本と労働との基本的關係から」する細分化がなされてはいる。(二四七頁)

(A) 中小工業内部の關係

(i) 中小資本家群とその労働者群との關係 (低賃金—剩餘價值生産)

(ii) 中小資本家群相互の關係 (過当競争)

(B) 中小工業と独占的工業との關係

(i) 中小資本家群と独占資本家群との關係 (剩餘價值の再分配問題)

(ii) 中小資本家群と独占的工業の労働者群との關係 (下請賃金の遅延と低賃金の問題)

(iii) 中小工業労働者群と独占的工業の労働者群との關係 (規模別賃金格差問題)

この「細分化」はあまりにも「順列組合せ」的な恣意性をもつ。複雑なからみあいをもち次元の異った諸「關係」が同一次元に並列

されているからである。ともあれこのような「關係」がさきさきの「相互依存的・相互扶助的關係」だとして、問題の焦点が「資本対資本」の収奪關係にあるかぎり、いかなる大資本がいかなる小資本を、いかなる關係において利用収奪し、あるいはいかなる(競争)關係を通じて駆逐淘汰するのかが、「経済学」的に説明されなければならぬであろう。それが単に「相互依存的・相互扶助的關係」として、あるいは「中小資本群と独占資本家群との關係」一般としてあつかわれその言葉だけでほとんど終っている点は読むものにとつてまことに不満である。これは第三章「中小工業問題の具体的展開」に期待をかけても、明確な説明はえられない。ここでは、「中小工業問題はどのような問題群に類別されるであろうか」(二七五頁傍点—引用者)という問題意識が先行しているからである。利潤率・資本の階層化、競争力の格差が断片的にはふれられるが、いわば他の論者の所論の紹介であり、積極的なまた首尾一貫した説明となっていない。こうして、さきに紹介した著者の中小工業問題の本質把握自体は正しいとしても、問題はそこで行きづまってしまっている。そこからさき、この抽象的段階での「本質把握」にすぐに具体的な現実的問題を、「企業系列化」までを含めて、強引にツギ種しているという印象をうけるのである。つまり「本質把握」と現実的問題との重大な空隙をうずめる「理論」的媒介環が欠如していると思われ。

その媒介環は要するに、独占資本主義段階では、なぜ巨大資本が劣弱資本を支配・利用・収奪できるのか、いかなる形態・關係を通

じて支配・利用・収奪できるのか、それゆえ全体としてはいかなる「経済法則」が貫徹するのかということである。もちろんこれは大きな問題であって、この解答がなければ中小企業問題は論じられないということではない。逆に、中小企業問題自体が、著者のいう通り、独占資本主義段階の構造的矛盾の一形態なのであって、この面の研究を通して独占の経済理論を究明することが可能であり必要なことである。この問題意識の貫徹・発展こそが重要なのである。本書では結局、従来の「中小企業問題の理論」の比較検討を通して、抽象的な「問題の本質把握」にすべてが収斂してしまい、それからさきの問題意識の積極的発展・展開はみられないといえる。

その点で、あとの「本質把握」とまへの「中小工業の存在要件」(第一章第2節)との関連が全く不明確であることに重大な原因があると思われる。著者が一般にあげられる「中小企業存在の具体的条件」は理論的解明として不十分であるとして、積極的に「独占資本の成立に伴う二種分解の論理」をもち出される(一七頁)のであるが、この説明がさらにおしひろげられ深められていく過程で、中小企業問題の「本質」がいかに現象するかがより多彩に把握されるならば、ちがった展開をみたであらうと思われる。しかしその「論理」

の説明は断片的であり、駆け足であり、「結局は巨大資本に従属した中小工業」が強調されているにすぎない。問題の中核が資本対資本の関係であるかぎり、理論的説明としては、従属を語るまえに競争・競合が明らかにされるべきである。いかなる生産部門にいかなる(規模の)資本が配置されており、そこでの競争関係はいかなるものであるかを具体的に発展史的に把握するなかで、独占と非独占・中小企業との対抗と従属関係が語られるべきではなからうか。

4、以上、本書の基本的な点について問題と思われることのみを指摘したのであるが、それは著者の問題意識にもよることであり、必ずしも射ている点とはいえないかもしれない。

ともあれ最後の指摘として、「中小工業経営論(序説)」という魅力的な題名の本書は、どういう意味において「経営論序説」であるのかの説明は全くなされてない。「中小工業における個別資本の運動を明らかにする経営学的研究としての中小工業経営の問題」(一四八頁)という表現が一ヶ所孤立的にみられるのみである。(昭和三七七年七月、森山書店刊、二四〇頁、六八〇円。)

(佐藤 芳雄)